

# A c a n t h u s

第36号

平成23年6月21日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

今年も6月4・5日に「一高祭」が開催された。来場者は2日間で5千人。このうち千人が、連続テレビ小説『おひさま』のロケ地となった旧本館にまで足を運んでいただいた。明治期の洋風建築を代表する旧本館は、多くの同窓生にとって、若き日の命の躍動が凝縮された“思い出の場”そのもの。現在、旧制中学校等で国の重文に指定されているのは5校あるが、その最初でもあった。今号も、この貴重な文化遺産の誕生にちなんだエピソードを紹介したい。

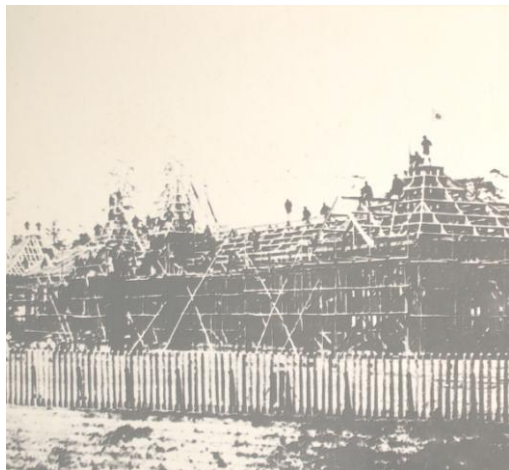


「一高祭」(6/4)・旧本館ミニコンサート

## 真鍋の新校舎

明治37年7月5日、女学校・県庁・病院などの噂のあった真鍋台の新校舎が上棟式を迎えた。そして、同年12月、土浦中学校新校舎として完成をみた。建設のための予算は総額六万円余。明治36年度の県予算総額が百十萬円程度であったことを考えると、その約6%にも当たる巨額なもので、当時の教育にかける並ならぬ熱意のほどがうかがわれる。

当時の中学校と言えば実用第一の質素な校舎が普通であったが、西洋の香り漂うゴシック風建築は、大きな話題を提供したばかりか、今日でも創建当時の威容が十分に感じ取れ、見る人を魅了している。さらに言えば、高い天井、重厚な扉、桜色と濃茶のペンキの配色。細部まで荘重で、いかにも勉強にふさわしい雰囲気がかたい立っている。そして昭和51年、旧制中学校校舎としては全国初の重要文化財に国より指定されるとともに、多くの同窓生には、若き日の思い出がつまった郷愁の場として親しまれている。



真鍋校舎の上棟式(明治37年7月)

## 旧制中学等で国重文は他に四校

ところで、旧制中学校等の国指定重要文化財はわが母校のほかにも4校があり、いずれも大切にその保存がはかられている。津山中学校(現岡山県立津山高等学校)・富山県農学校(現富山県立南砺総合高等学校福野高等学校)・安積中学校(現福島県立安積高等学校)の各旧本館。それに、わが旧本館と同じく駒杵勤治の設計による太田中学校(現茨城県立太田第一高等学校)講堂である。本校は太田一高とともに昭和51年に、安積高校は昭和52年に、津山高校は平成7年に、福野高校は平成9年に、それぞれ指定を受けたのである。

いずれも明治30年前後に建てられた明治期の代表的な木造洋風建築であり、百年以上にわたり、風雪や震災等の試練に幾度となく遭遇し、それにひたすら耐えてきたのは想像するに難くない。



富山県農学校(現南砺総合高等学校福野高等学校)



津山中学校(現岡山県立津山高等学校)



安積中学校(現福島県立安積高等学校)

今般の大震災における本校旧本館については、第34号で破損状況を詳述したが、少なからず損傷を受けた。喫緊の難題を目の当たりにし、拱手傍観では済ませられず、まずは同じ重要文化財校舎の解体修理の実態を調査すべく、この夏には福野高校の視察を計画している。

## 設計者「駒杵勤治」

さて、今号は、わが旧本館の設計者「駒杵勤治」について述べてみたい。

昨今と異なり、建築に関する情報不足もあって、わが旧本館は明治期の洋風建築の外観から、長い間、外国人の設計によると考えられていた。しかし、前号で既述のとおり、保存修理の調査の際に、偶然にも「棟札」が発見され、新進気鋭の県技師「駒杵勤治」の設計によるものであることがまぎれもなく判明した。

だが、「駒杵の人となり」については、わからないことが多い。本校旧本館の設計者であったことが知られたのも、昭和49年の「棟札」の発見が契機であり、その時、すでに本館が竣工して70年余の歳月が過ぎていた。彼が、茨城県技師として任にあったのはたったの2年3ヶ月。その後、内務省技師・海軍省技師を経たのち、官吏を退いて、建築事務所を開設した。そして大正8年に42歳の若さでこ

の世を去ってしまったのだ。短かった生涯と作品があまり残っていなかったゆえに、「建築家駒杵」が忘れ去られ、彼の偉業は人知れず封印されたまま、時を過ごしてしまっただけと思われれる。

昭和49年に一色史彦氏(高11回卒)によって旧本館天井裏より発見された棟札

上棟式 大棟梁茨城県技師 工学士駒杵勤治

表「上棟式 大棟梁茨城県技師 工学士駒杵勤治」

明治廿七年七月五日

裏「明治廿七年七月五日 請負人石井権蔵」

駒杵勤治は、明治10年、現在の山形県新庄市に生まれ、明治32年9月、東京帝国大学工科大学建築科(現東京大学工学部建築学科)に入学。彼が、なぜ建築学を志したかは知る術もないが、明治10年代になると山形県内でも、文明開化の波が実感できるほど、洋風建築の話題が飛び交い脚光を浴びていたと考えられ、これが建築学に突き進む大きな動機づけになったのではないかと推測できよう。

そして、明治35年12月に、他の8名の同級生より8カ月も早く繰上げて大学を卒業した(当時は9月入学、8月卒業が一般的であった)。すぐに茨城県営繕工師として採用され、翌年5月には技師に昇格している。この辺の事情も明らかになっていないが、当時の県知事である河野忠三が、意欲的に進めていた「中等教育」に力点を置いた施策と無縁ではないようである。茨城県が明治30年代に中学

校や女学校・商業学校等を相次いで設立していった時期とも、まさに符号して行く。特に、彼が任用された明治35年は、県立商業学校(現県立水戸商業高等学校)が設立はされたものの、民家を校舎として授業が展開されていた。だからこそ、校舎の建設は焦眉の急であっただろう。ここに、工科大学長辰野金吾に対して特に優秀な学生を強く望み、「駒杵」を必要とする県側の事情があり、彼もまた、大学を早く卒業することで、その要請に応えたと解釈できる。



真鍋校舎(現在の旧本館)の設計者駒杵勤治

そして、彼が水戸に赴任して2年3ヶ月の獅子奮迅ぶりは、本当に驚嘆に値する。県立学校を中心に次々と公共施設の建築に携わり、キツチリとした図面の設計から施工監理に至るまで手抜きがなく、精魂を傾け、その敏腕を発揮したのである。作品群としては、本校旧本館・階段教室(明治37年・階段教室は昭和49年取り壊し)・太田一高講堂(明治37年)・旧県立商業学校本館(現水戸商高・明治37年)・旧竜ヶ崎中学校講堂(現竜ヶ崎一高・明治37年)・旧高等女学校講堂(現水戸二高・明治37年)・旧麻生警察署・旧下館警察署、そして旧茨城県立図書館(明治36年)・旧水海道中学校講堂(現水海道一高・明治37年)等があげられる(年号は完工)。



太田中学校(現茨城県立太田第一高等学校)講堂

手掛けた洋風建築は、ゴシック・バロック・ロココなど多種多彩であるが、その全てに、彼の建築に対する哲学や情熱、エネルギーが見てとれ、心が揺さぶられる。また「：明治の聖代に於て、：建築が、粗雑拙劣を極めると有つては、他國人に對しても耻かしい譯だ。」(小野武雄著『建築設計図案』序文)をみても、明治人特有の新時代を創っていく気概や使命感を肝に据えていたのがわかる。

前号でも紹介した、建築史家の一色史彦氏(高11回卒)は、「建築家・駒杵」に対し、畏敬の念をもって、

「あの若さでこれだけの仕事をするのはたいへん。知力、氣力、体力を使いきったはず」と評するとともに、

「ものに心あり。建築物を作った人の志や、残してきた人の思いが見えてきたときが一番うれしい。」と述べている。

一色氏も多くの同窓生と同様に、旧本館や、今はない階段教室で青春期を過ごしている。そして何十年も前の高校時代を昨日のように脳裏に浮かべるとともに、旧本館をはじめ、懐かしの校舎に対する思い入れも決して人後に落ちないであろう。そのうえで、建築史学を専門とする、氏ならではの高い見識に裏打ちされた発言は、正鵠を射ているに違いない。

### 伊勢神宮や佐世保鎮守府庁舎も

茨城県技師として力を尽くした後は、彼は内務省技師として伊勢神宮式年造営に関わり、さらにその後、海軍技師として佐世保鎮守府庁舎建設にも携わったことが知られている。やがて官吏をやめ福岡市で建築事務所を開設したが、大正8年2月、福岡市において結核により42歳の若さで、その生涯を閉じている。

エリート建築家・駒杵の生涯は余りにも短く、しかもその間の業績は、佐世保での功労はあった(次号で詳述の予定)ものの、本県での大車輪の勲功が群を抜いている。僅かな在任期間にもかかわらず、上述の作品を残すなどひととき輝いたものであった。また、わが旧本館を見ても、その力量は一目瞭然である。築百年を経た今日であっても、その設計理念は斬新にして氣品に満ち、人の目をひきつけてやまない。その空間の中で、学びの謳歌に浴せたのは私どもの誇りである。近年、テレビや映画のドラマロケ地に利用されることが多く、一般の方々の関心も寄せられるようになってきた。特にNHKテレビ小説『おひさま』の中で、長野県安曇野女学校の一場面に玄関や廊下が使用されたため、公開日(毎月第2土曜日)には、これまで以上に多くの人が来訪いただけたようになった。撮影現場を確認し、そのシーンを思い描いたり、ご自身の高校生時代に思いをはせたりして、人それぞれに「旧本館散策」を堪能されているのだ。この6月4・5日の「一高祭」では、来場者五千人のうち、幅広い年齢層の様々な方々が、千人も旧本館を訪ねてくださった。(次号に続く)